

## 立田慶裕先生のご退職にあたって

井上 豊久

2024年3月、昨年度まで教職課程の主任をされていた立田慶裕先生が退職される。2014年に本学に着任されており、日本の教育社会学者、社会教育学者として著名な方である。1980年代の半ば、私が大学院生の頃、先生は既に日本生涯教育学会等でご活躍されており、その当時は山本先生という苗字であったが、私も指導・助言をいただいた。東海大学を経て文部科学省国立教育政策研究所で働いておられた頃、共同研究者としていくつかのテーマに関わってご一緒させていただいた。2000年に国立教育政策研究所の総括研究者になられた。私が前任の福岡教育大学に勤めていたころ、先生にボランティアの役割とその意義についての講義をお願いした事があり、人生で重要なのはあいさつ、まず名前を覚えようなどと、現場で役に立つ幅広い見識とユーモアを交えたお話に学生が感動し、学びを充実させていただいたことが印象深い。以後今日にいたるまで、教職課程における学生の育成、教育学の研究者としての仕事をご一緒させていただいてきた。国立教育政策研究所(旧国立教育研究所)に1993年より勤務し、2014年に退職するまで生涯学習についての多くの研究テーマにかかわってこられた。精力的に毎年のように多くの著書を刊行され、『生涯学習の現代的課題』(1996年、全日本社会教育連合会)、『メディアと生涯学習』(2000年、玉川大学出版会)、『参加して学ぶボランティア』(2004年、玉川大学出版会)、『教師のための防災教育ハンドブック』(2013年、学文社)、『読書教育のすすめ—学校図書館と人間形成』(2023年、学文社)他、理論研究とともに現場にも有用な本を数多く出されている。メディア・リテラシー教育、成人教育、健康教育、防災教育、読書教育、学習需要などの研究所のプロジェクトを主導されていただけでなく、『キー・コンピテンシー —国際標準の学力をめざして—』(2006年、明石書店)、『知識の創造・普及・活用 —学習社会のナレッジ・マネジメント—』(2012年、明石書店)、『学習の環境—イノベティブな実践に向けて』(2023年、明石書店)、といった重要な国際的学術書の翻訳にも数多くかかわってこられた。また、生涯にわたる音楽文化の創造のために、生涯学習音楽指導員の研修にも専門家として携わられた。立田先生の研究テーマは、生涯学習一般はもちろんのこと、メディアや図書館についてなど生涯学習の現実の問題にも対応されたものも多く、幅広く高い見識から、いかに学術的に解決していくかということにもあったと考えられる。神戸学院大学人文学部教授・教職課程主任の立場で教員養成に真摯にかかわってこられた。教職を目指す多くの学生が先生のゼミを希望し学校現場に立っている。立田先生はICTの重要性をいち早く認識され教職課程ではパソコンを使った教育・学習システムであるmanabaを導入され、有用な活用を図ってこられた。常に先駆的に研究を進めるだけでなく図書館関係の委員をお勤めになるなど大学教員として地域へのご貢献も多い。私も先生のご指導を賜った一人として教職課程の充実に加え、社会や地域に貢献したい。